

PAC 分析による 0 歳児の保育記録の分析

原 孝成¹・松隈敬之²・古賀京子²・天本絹子²・中村美香²

The Analysis of Nurturing Records of 0 Year-Old Infants Using PAC Analysis

Takaaki Hara¹, Takayuki Matsukuma², Kyouko Koga²,
Kinuko Amamoto² and Mika Nakamura²

The purpose of this paper is to clarify that care givers understand their nurturing acts in detail by rereading their nurturing records carefully. Two care givers chose four 0 year-old infants. Then those infants' nursery day care records from April to December were examined every 2 weeks. The most important records or impressions were chosen. Finally, we analyzed those chosen records using PAC (Personal Attitude Construct) Analysis. PAC Analysis results of those four infants' records were interpreted by four nurturing persons and one researcher. The result of PAC Analysis shows that around the time of an infant's first birthday is important time for nurturing acts. PAC Analysis is expected to play an important role in the overall analysis of infant nurturing records.

Key Words: PAC (Personal Attitude Construct) Analysis, 0 Year-Old Infants, Nursery Day Care

問 題

保育士自身によって記録された保育記録は、その保育士の子どもの見方や保育に対する考え方、それに基づく子どもとのかわりの中で気になることや印象に残ったことが記録されており、これらは、子どもの理解を深め、自分自身の保育実践を反省し、次の保育実践を計画していくうえで重要な資料となりうる。中村・磯部(1994)も、日々の保育において、保育者は目の前にいる子ども一人ひとりに対して、その時点での思いや考えがあつて行動するが、保育後に振り返ってみると、保育場面の把握の仕方に思い違いがあつたり、一人ひとりの子どもの育ちにかみ合っていないかつたり、保育者の対応について考え直すこと

ろが出てくることを示している。そして、保育後の長い時間経過の中で保育記録を繰り返し読んで、日々の保育の見直し、幼児理解を深めながら保育のあり方をみつめなおすことの重要性を指摘している。

また、深田ら(1995)と米神ら(1995)は、保育記録は客観的な観察記録と異なり、記録者が当事者である保育者自身であることで、記録される事象が起こった文脈や、そこでの幼児の考えや方々感情など第三者観察では得にくい情報をキャッチし、記述できることを指摘している。本研究では、毎日の保育記録の中から保育士自身が重要もしくは印象に残ったものを抜き出し、それを振り返ることにより保育士自身が自己の保育活動の理解を深めることを目的とする。

毎日の保育記録には子どもの発達や保育内容など子ども理解

1 西南女学院短期大学

2 田代保育園

や保育士の自己理解のための貴重な情報が含まれている。しかしながら、膨大な量に及び保育記録をまとめていくことには困難をともなうことも事実である。そこで本研究では、そのアプローチの1つとして、PAC(Personal Attitude Construct: 個人別態度構造)分析を利用することとした。PAC分析とは、個人別の態度構造を測定するために内藤(1993,1994)によって開発された分析方法である。本来の分析の流れは、(1)当該テーマに関する自由連想(アクセス)、(2)連想項目の類似度評定、(3)類似度距離行列によるクラスター分析、(4)クラスター構造のイメージ解釈、(5)総合的解釈というステップをふむ(詳しくは内藤,1997,2001を参照)。本研究では、自由連想にあたる部分を、保育士が保育記録の中から重要だと考えるものや印象に残ったものを抽出するという方法を用いることとする。

PAC分析は比較的新しい分析手法であるが、内藤(1997)は、PAC分析を用いることのできる領域は極めて多彩になることを示唆している。恋愛のような現在のその個人の態度が重要である1回性の強いテーマや、調査対象者の属性が特殊で少数の場合、性や芸術に関するものなど個人の本音がつかみにくいテーマに対して威力を発揮することが期待されている。すでに臨床心理(例えば井上,1997,1998)や教育心理(例えば蘭・武市・小出,1996)などの事例研究の分野で応用されている。

臨床場面での利用では、臨床的介入の効果の測定や自己理解・自己受容を促進するためのツールとして利用可能であることが示されている。井上(1998)は、PAC分析のカウンセリング導入への効果として、大きく3つの機能の分野として整理している。これを簡単に整理すると以下ようになる。

第1の機能分野『**直接的**精神間機能分野』: 1対1のカウンセリングの場におけるカウンセラーとクライアントの関心に注目した分野。

【1a.導入促進機能】:「カウンセリング導入への心理的抵抗を低減し、動機を高める」ことにより、関係が成立することを助ける道具である。

【1b.自己開示促進機能】:クライアントが心理的に抵抗ある事柄も含めて、自己開示をおこなっていく上で、語連想という心理的に抵抗がない方法から出発し、樹形図による自己対面による対話をおこなって、自己開示の効果がある。

【1c.信頼感形成機能】:カウンセラーとクライアントの2者の共同活動によって信頼感を深め関係の安定に寄与する。

【1d.対話発展機能】:デンドログラム(樹状図)解釈の対話など

を通して、共通話題によるコミュニケーションが発展する。

第2の機能分野『**精神間**機能分野』:クライアント自身の問題への認識や自己理解など精神世界とその変化に関するもの。

【2a.共有知識的理解機能】:共有知識的理解が共同活動を通して深まる。

【2b.明確化機能】:適切な刺激語によるPAC分析により問題の「明確化」が生ずる。

【2c.自己理解促進機能】:PAC分析の全体を通してクライアントの自己理解と他者理解が促進する。

【2d.カウンセラー気づき機能】:カウンセラーにとって認識の深まりや気づきのきっかけになる。

第3の機能分野『**間接的**精神間機能分野』:1対1のカウンセリング場面を越えて、クライアントの持っている内面世界を、第3者にも理解可能な形で提示する。客観的なデータ・資料・査定・評価の道具としてのPAC分析の効果に関するもの。

【3a.記述記録機能】:カウンセリング過程内で生じている、個の主観的世界を客観的に記述し記録することができる。

【3b.実務説明機能】:コンサルテーションのための客観的資料として、クライアントの状況を説明するための道具となる。

【3c.評価査定機能】:カウンセリングの効果測定・評価するために、クライアントの内面世界がカウンセリング開始時からカウンセリング終了時の2時点でどのように変化したかを、事前・事後テスト的に利用し、カウンセリングの効果の評価する。

本研究では、第2・3機能分野に着目し、PAC分析から得られた情報を手がかりとして、保育士自身が0歳児の保育記録を解釈し、自己の保育活動をより深く理解する資料として活用できるかどうかを明らかにする。

方 法

対象 対象となったのはS県内の保育所の0歳児のクラスであった。12月の時点でのこの0歳児クラスの園児数は13名で、担当の職員(保育士と看護師)は4名であった。

保育者:0歳児担当保育士2名(A保育士女性;保育歴25年,B保育士女性;保育歴3)。

ターゲット児:0歳児クラスのL児(男児,9月X日生,4月入園),T児(女児,10月X日生,4月入園),F児(男児,8月X日生,4月入園),I児(男児,11月X日生,5月入園)の4名。

手続き 2名の保育士がそれぞれ月齢に近い2名の園児をターゲット児とし、保育記録の分析を行った。A保育士がターゲット児と選んだのはL児とI児であり、B保育士がターゲット児とし

て選んだのは、T児とF児であった。ターゲット児の毎日の保育記録のうち入園時から12月までの各月の前半と後半の記録から最も重要だと思われるもの、もしくは印象に残ったものを保育士自身が抜き出した。なお、1日の記録の中には複数の内容が書きとめられている場合が多く、その場合は一番重要だと思う1文を抜き出すか、短くまとめるようにした。

抜き出されたそれぞれの記録(L児T児F児は18項目I児は16項目)に対して、保育士自身がポジティブなイメージを持っている場合は+、ネガティブなイメージを持っている場合は-、どちらともいえない場合は0を記入した。また、ポジティブなイメージの項目数からネガティブなイメージの項目数を引いた値をポジティブ得点とした。

次に、抜き出された項目間の類似度距離行列を作成するために、全ての項目対に対して保育士自身が7段階評定(非常に似ている1-非常に似ていない7)の類似度評定を行った。評定した値のマトリックスに基づきウォード法によるクラスター分析を行った。抽出されたデンドログラム(樹状図)をもとに、ターゲット児の保育記録の解釈を行っていった。

保育記録の解釈には担当のA,Bの保育士及び園長、主任保育士、研究者の5名で行った。1回あたり4~6時間の検討時間をついやした。解釈に対しては、5人がそれぞれの観点から意見を出し合っていくバズセッション形式で行い、1月~3月までの3ヵ月間定期的にこのような検討会を開催した。よって解釈のための検討会に費やした時間はのべ80時間を越えていた。

結果と解釈

L児、T児の保育記録の解釈

L児のクラスター分析の結果を図1に、記録の内容を表1(表内の記録内容は保育士が書いたものをそのままテキストに直したものであるため修正は行っていない。以下表2,3,4も同じ。)に示す。ポジティブ得点は3点でポジティブなイメージの項目が少なかった。

クラスター分析の結果3つのクラスターが抽出された。第1クラスターは「.....泣いている。」「.....ぎゃーぎゃー泣き.....」などの項目が含まれていたため「**ネガティブな情動反応**」とした。第2クラスターは「.....につこりしている。」「.....近寄っている。」などの項目が含まれていたため「**ポジティブな情動反応**」とした。第3クラスターは「.....手すりを持って押しあげている。」「.....時々歩いていた。」などの項目が含まれていたため「**身体運動**」とした。

T児のクラスター分析の結果を図2に、記録の内容を表2に示す。ポジティブ得点は0点でポジティブなイメージの項目が少なかった。

クラスター分析の結果3つのクラスターが抽出された。第1クラスターは「.....泣き出す。」「.....あまり握ろうとしない。」などの項目が含まれていたため「**ネガティブな情動反応**」とした。第2クラスターは「.....声を出して笑う。」「.....笑ってかえす。」などの項目が含まれていたため「**ポジティブな情動反応**」とした。第3クラスターは「ボールをとりに行こうとするが.....」「.....「おいで」と言われると行く」などの項目が含まれていたため「**身体運動**」とした。

L児とT児はともに保育士から対応が難しい子どもとして報告されていた。両児ともポジティブなイメージの項目数が比較的少ない点が共通していた。また、両児とも月齢12ヵ月頃まで記録の中心がネガティブおよびポジティブな情動反応に関する記録がその中心であり、それを過ぎてから身体運動面の記録が多く出現していた。このことは、両児ともに保育士の視点が情緒面に向けられていたことを示していると思われる。特にT児は月齢12ヵ月頃までネガティブな情動反応に関する記録が頻繁に出てきている。L児とT児の保育記録の評定はそれぞれ別の保育士が行ったものであったが、対応の難しい子としてあげられた子どものクラスターが類似しており、その出現傾向も似たような傾向を示していることを考慮すると、0歳頃の対応の難しい子どもとして上げられる子どもには特定のパターンが存在しているのかもしれない。

F児の保育記録の解釈

F児のクラスター分析の結果を図3に、記録の内容を表3に示す。ポジティブ得点は12点で全般的にポジティブなイメージの項目が多かった。

クラスター分析の結果5つのクラスターが抽出された。第1クラスターは「.....声掛けされるとにこと笑う。」「.....保育士と目が合うと笑ってかえす。」などの項目が含まれていたため「**ポジティブな情動反応**」とした。第2クラスターは「.....「好き好きは?」と言われるとほおずりをする。」「.....保育士のところまで行き、抱きつく。」などの項目が含まれていたため「**社会性の芽生え**」とした。第3クラスターは「.....「アアア」と声を出している。」「.....動物を指さして「アアア」と言ったり、.....」などの項目が含まれていたため「**言葉の芽生え**」とした。第4クラスターは「.....ハイハイしてとりに行く。」

表1 L児の保育記録

記録の時期	記録内容	イメージ
C1「ネガティブな情動反応」		
X1 4月前半	・「いない、いない、ばあ」で、ガーゼを顔に近づけてもらおうと泣いている。	0
X6 6月後半	・「かたつむり」を見ても、そっぽを向き、手でさわろうともせず、泣いている。	-
X10 8月後半	・おばけ大会は、会場が暗くて、怖かったのか、ぎゃーぎゃー泣き、保育士に抱きついている。	-
X3 5月前半	・手押し車、室内用すべり台、お宮の「シーソーブランコ」など、はじめて、遊ぶときは、怖がって泣いている。	-
X18 12月後半	・すずらんテープについている「すず」を鳴らす遊びをすると、保育士にしがみつき、抱っこされ、なかなか手を出さない。	-
C2「ポジティブな情動反応」		
X2 4月後半	・1歳児・2歳児の男の子におもちゃをもらおうとにっこりしている。	0
X5 6月前半	・年長児から名前を呼ばれると、「ハイハイ」をして、近寄っている。	0
X7 7月前半	・赤ちゃん体操をするときにここにこしている。	+
X9 8月前半	・手遊びの時、指を示したり、手を大きく動かしている。	0
X12 9月後半	・気に入ったおもちゃがあると、ハイハイして、とりに行っている。	0
C3「身体運動」		
X17 12月前半	・友達を手押し車に乗っているのをうしろの手すりを持って押してあげている。	+
X14 10月後半	・ブロックを両手に持って、カチャカチャしたり、くっつけたり、はずしたりしている、保育室内を、ほんの少し、時々歩いていた。	+
X15 11月前半	・保育士から、ふわふわボールを投げてもらおうと、ハイハイしてとりに行き、歩いて保育士のところまで行き投げています。	+
X11 9月前半	・「玉入れごっこ」の玉がころがっても、拾おうとせず、「カゴ」の中にも、入れようとせず、保育士と一緒に入れる。	0
X13 10月前半	・「いない、いない、ばあ」を、保育士がやってみると、目を両手でかくして「ばあ」と、している。	+
X16 11月後半	・投げたボールを友だちと追いかけている。	+
X4 5月後半	・手押し車に後ろ向きに乗せてもらおうと、少しだけ前に進んでいる。	0
X8 7月後半	・手押し車のタイヤをさわったり、おもちゃの電話の受話器を持って、ダイヤルをまわしている。	+

ポジティブなイメージの項目数 7

ネガティブなイメージの項目数 4

ポジティブ得点 3

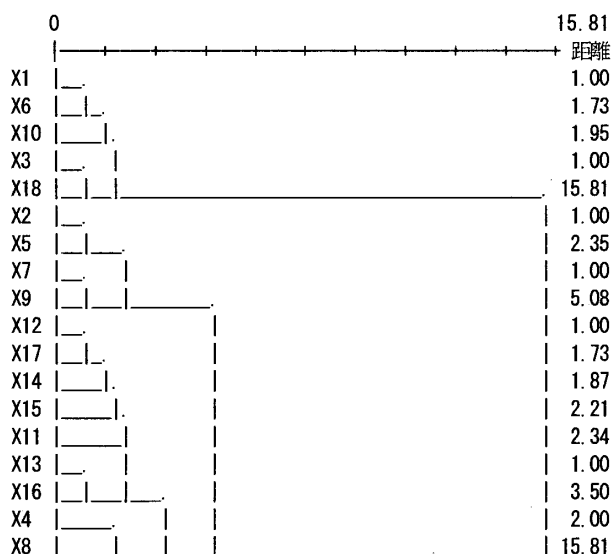


図1 L児のクラスター分析の結果

「……なげたつもりでボールを渡す。」などの項目が含まれていたため「**身体運動**」とした。第5クラスターは「……「階段からよ」と言われるといやがり泣きじゃくる。」「……順番がまてず泣いたり、違うところに行ったりする。」などの項目を含んでいたため「**自我の芽生え**」とした。

クラスター解釈の補足：当初、第2クラスターと第4クラスターは項目内容がどちらも子どもの身体運動を中心とした記録になっており、酷似しているように感じられたが、クラスターとしては明確に分かれていた。評価を行った保育士自身も明確な違いを意識化することが難しいと報告していた。ただし、第2ク

表2 T児の保育記録

記録の時期	記 録 内 容	イメージ
C1 「ネガティブな情動反応」		
X1 4月前半	・「いないいないばあ」を怖がるなど初めてのものには怖がり泣き出す。	-
X8 7月後半	・中学生に抱っこされると泣き出す。	-
X3 5月前半	・おもちゃを手に握らせてもらおうと落としたり、泣き出したりとあまり握ろうとしない。	-
X9 8月前半	・すべり台では保育士が支えていても階段を登る時から体をかたくする。	-
X6 6月後半	・トントンと寝かせつけてもなかなか眠れない。	-
X12 9月後半	・散歩車に乗るのを嫌がり保育士に抱かれたがる。(泣いて訴える)	-
X14 10月後半	・シールを貼る時、トントンとしたり、新聞紙を手にするとパンパンたたいたりテーブルをたたいたりすることが多い。	-
C2 「ポジティブな情動反応」		
X2 4月後半	・音楽や保育士に声掛けをされると声を出して笑う。	+
X5 6月前半	・保育士に声掛けをされたり名前を呼ばれると笑ってかえす。	+
X7 7月前半	・ふれあい遊びを喜び、にこにこ笑ったり、手足をバタバタとして喜びを表現する。	+
X16 11月後半	・ダンボールにふわふわボールを入れて遊ぶ時、ダンボールのふちをもち、立ち上がるとうとする。保育室の中でもひとりで立つ姿が見られる。	+
X4 5月後半	・保育士に支えてもらいながら、手押し車の背もたれを握り少しの間座っている。	+
X11 9月前半	・しぼん玉がとんでくると手を出したり、玉入れの玉を手でとろうとしたりする、こぼしながらでもコップでのむようになる。	+
X10 8月後半	・音が出るおもちゃを見せると、興味を示して、おもちゃのところまで、ハイハイ(ずり這い)ができるようになる。	+
X13 10月前半	・ベットの柵を持ち自分でよいしょと立ち上がり、つかまり立ちをする。	+
C3 「身体運動」		
X15 11月前半	・ボールをとりに行こうとするが、途中で止まりあきらめる。	-
X17 12月前半	・名前を呼ばれ、「おいで」と言われると行く。	0
X18 12月後半	・ゆっくりだが7,8歩ほど歩くようになる。	0

ポジティブなイメージの項目数 8
 ネガティブなイメージの項目数 8
 ポジティブ得点 0

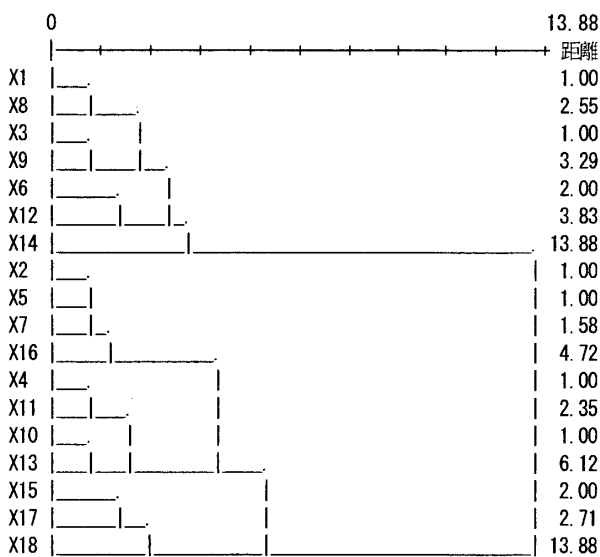


図2 T児のクラスター分析の結果

ラスターが保育士などのかかわりに対する反応を含んでいること、記録の時期が比較的第4クラスターが月齢の早い時期、第2クラスターが月齢の遅い時期に出てきていることを考慮し、それぞれの命名を行った。これは、保育士が一見類似した子どもの行動も、無意識に視点を変えて理解していることを示していると思われる。

F児は全般的にポジティブなイメージの項目が多く、保育士自身も対応しやすい子どもであったと報告していた。記録の内容も「身体運動」「ポジティブな情動反応」「社会性の芽生え」などがバランスよく記録されていた。また、月齢の後半には「言葉の芽

表3 F児の保育記録

記録の時期	記録内容	イメージ
C1「ポジティブな感情表現」		
X2 4月後半	・保育士に声掛けされたり、お兄ちゃんに声掛けされるとにこにここと笑う	+
X7 7月前半	・赤ちゃん体操を喜んだり、おもちゃで遊んでいる時保育士と目が合うとにこにここと笑ってかえす。	+
X12 9月後半	・大きな布をかぶせてもらい手を動かしているがなかなか、はずれず泣き出す、布がはずれるとまわりを見てにこにここと笑う。	+
X16 11月後半	・ステージでお遊戯の練習をする時音楽が流れると体をゆらしたり前に座っているお友達に手をふってにこにここと笑う。	+
C2「社会性の芽生え」		
X6 6月後半	・新聞紙で「てるてるぼうず」を作る、出来上がった後「好き好きは?」と言われるとほほずりをする。	+
X13 10月前半	・園庭で保育士に「よーいドン!」と言われるとお友達と一緒ににこにここと笑いながら走り保育士のところまで行き、抱きつく。	+
X3 5月前半	・保育士に名前を呼んでもらうと手をあげて返事をする。	+
X11 9月前半	・運動会の練習で年中・年長さんがかけっこをしているのを見て、手をたたいて喜んでた。	+
C3「言葉の芽生え」		
X8 7月後半	・しゃぼん玉がとんでいるのを見て、指をさしたり「アーアー」と声を出している。	+
X14 10月後半	・絵本を見るときについている動物を指さして「アッアッ」と言ったり、うさぎの絵をよしよしとする。	+
X18 12月後半	・「ばあ」と言って笑ったり、食べ物を見て「マンマ」や電話の受話器を耳にあて「アッアッ」と言い、笑顔で話している。	+
C4「身体運動」		
X4 5月後半	・保育士が新聞を破っているのを見ると自分も破っていた風船を作るとハイハイしてとりに行く。	+
X5 6月前半	・ボールが転がるとハイハイしてとりに行き、保育士が「ちょうだい」と言うと、両手をあげ、なげたつもりでボールを渡す。	+
X1 4月前半	・寝返りをした後、くるくると回ったり、後ろにバックしたりおもちゃを手にとり口に入れたりじっと見ている。	0
X10 8月後半	・大型積み木を並べて保育士が準備しているとその横で積み木に登って遊んでいる。	+
C5「自我の芽生え」		
X9 8月前半	・室内ずべり台ですべる方から何度も登っていたので「階段からよ」と言われるといやがり泣きじゃくる。	0
X15 11月前半	・お友達がしている間、順番がまてず泣いたり、違う所に行ったりする。	-
X17 12月前半	・思い通りにならないと、口をとがらせたり、泣いて訴える。	-

ポジティブなイメージの項目数 14

ネガティブなイメージの項目数 2

ポジティブ得点 12

生え」「自我の芽生え」と言った記録が出てきていることも特徴的であった。さらに、ネガティブなイメージの項目として評価されていた2つの項目はともに「自我の芽生え」のクラスターに含まれていた。これは、F児が月齢の早い時期から情緒的に安定しており、月齢14ヵ月を過ぎたあたりからネガティブな情動反応が出現したが、この情動反応も単純な「泣く」行動ではなく「自我の芽生え」の1つのプロセスとして保育士がとらえていることを示している。

I児の保育記録の解釈

I児のクラスター分析の結果を図4に、記録の内容を表4に示す。ポジティブ得点は11点で一般的にポジティブなイメージの項目が多かった。

クラスター分析の結果3つのクラスターが抽出された。第1クラスターは12の項目からなり、子どもの身体運動、情動反応、

表4 I児の保育記録

記録の時期	記録内容	イメージ
C1「全般的発達」		
X3 6月前半	・コップの中に砂を上から入れてもらおうと、音に喜び、両手を広げてバタバタしている。	+
X6 7月後半	・手でつまんで、おかしや果物を食べている。	+
X7 8月前半	・タオルをかけると、自分で手ではらいのけ、顔を出し、くすぐられると、笑っている。	+
X13 11月前半	・ボールを「ハイハイ」したり、歩いたりして、追いかけて、さわると、にこにこしている。	+
X8 8月後半	・ハイハイして、おもちゃをとりにいつている。	+
X2 5月後半	・手押し車に、後ろ向きにすわり動かしてもらおうと喜び、止まると泣き出し、又、動かしてもらおうと、笑っている。	+
X12 10月後半	・空箱についたゴムのおもちゃを保育士と一緒にひっぱると、楽しかったのか、1人で何度も引っばっている。	+
X14 11月後半	・手を合わせて、頭を少し下げ、にこにこし、「いただきます」をしている。	+
X9 9月前半	・歌の時、“アーアー”と声を出している。	+
X10 9月後半	・年長児がかけっこをしている間、「あー・おー」とずっと言い、応援している。	+
X11 10月前半	・他のクラスの保育士に名前を呼ばれると、笑顔でバイバイしている。	+
X4 6月後半	・「かたつむり」を見て、手でさわっても、怖がることもなく、つぶそうとしている。	0
C2「ネガティブな情動反応(恐怖心)」		
X15 12月前半	・プレイジムのブランコに乗せてもらおうと、少し怖かったのか、体をそらせておろようとしている。	0
X16 12月後半	・風船がふくらみ、とんでくると、怖くて、保育士に抱きつき、泣いている。	0
C3「ネガティブな情動反応(身体接触欲求)」		
X1 5月前半	・一日中、泣き、保育士にずーと抱っこされ、眠ることもなく、抱っこされている。	-
X5 7月前半	・中学生から抱っこしてもらおうと、少しずつ泣き出し、保育士から抱っこされると、にこにこしている。	0

ポジティブなイメージの項目数 11
 ネガティブなイメージの項目数 1
 ポジティブ得点 10

言葉の芽生えを含んでいたのが「**全般的発達**」とした。第2クラスターは「.....少し怖かったのか、体をそらせておろようとしている。」「.....保育士に抱きつき、泣いている。」などの項目

が含まれていたのが「**ネガティブな情動反応(恐怖心)**」とした。第3クラスターは「一日中、泣き、保育士にずーと抱っこされ、

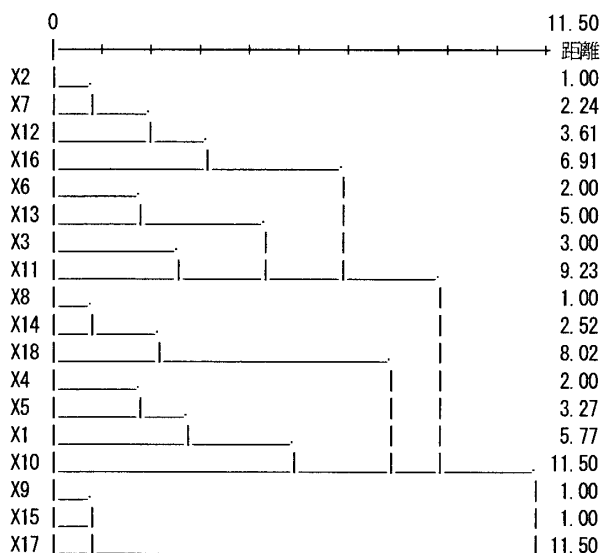


図3 F児のクラスター分析の結果

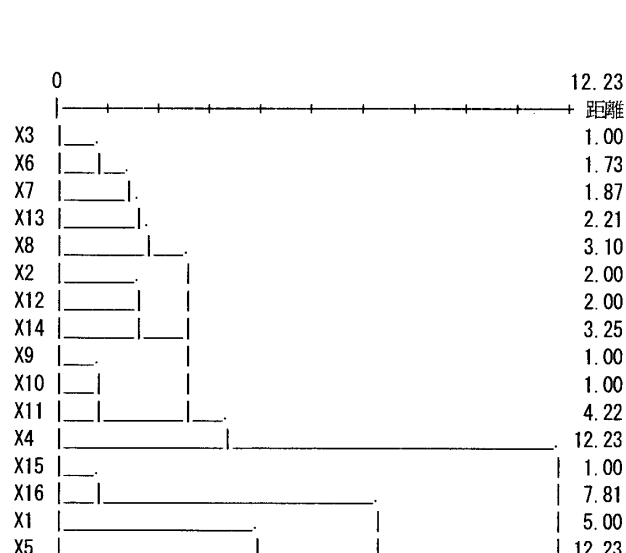


図4 I児のクラスター分析の結果

……」[中学生から抱っこしてもらおうと、少しずつ泣き出し……]などの項目が含まれていたので「**ネガティブな情動反応(身体接触欲求)**」とした。

クラスター解釈の補足：第2クラスターと第3クラスターはどちらもネガティブな情動反応を含むものであり、クラスター間の違いを明確にするのが難しかった。ただし、解釈を行っていく過程で、評定した保育士から「第2クラスターの項目が含まれる12月頃以降のネガティブな情動反応がI児これまでのものと少し違っているように感じられた」という報告がなされた。I児は入園当初から非常に情緒的に安定していたと報告されている。ただし、12月頃からそれまでI児にはみられなかった「怖がる」様子が保育士に感じられるようになったものと思われる。これは、同じネガティブな情動反応でも、その質的な違いを保育士が敏感に感じ取っていたことを示していると思われる。

全体的な解釈

各園児の保育記録をクラスターに分類し、記録された順に並び、記録された時点での子どもの月齢が一致するように並べ替えたものを図5に示す。

4児の保育記録のクラスター分析結果をみると、月齢の近い子どもでもその内容が質的に異なることが分かる。しかしながら、内容の質的違いがあるものの、月齢12ヵ月前後で各児の記録の内容が変化していることが読み取れる。T児とL児においては、それまで情動反応に関する記録が中心であったものが、月齢12ヵ月頃から身体運動に関する記録にシフトしてきている。また、F児においては「言葉の芽生え」や「自我の芽生え」といった内容が月齢14ヵ月頃から多く出現することが読み取れる。さらに、I児ではそれまでとは異なるネガティブな情動反応が記録されている。一般に生後12ヵ月では姿勢・移動運動、手指操作、音声言語・言語理解、対人行動など様々な側面で発達的变化が著しい時期であり、主体的に物事に関わろうとしたり、大人や他児に対して能動的に接するようになることが示されている(大阪保育研究所 年齢別保育研究委員会,1984 参照)。実践研究においても、イナイイナイバー遊びや追いかっこなど社会的遊びが生後9、10ヵ月頃に共有され、生後11、12ヵ月頃に盛んになる(遠藤1988)ことや、この時期には2名対1名という補完的役割関係を持ちはじめ、3者参加のゲームの基礎となる対人的能力を持っている(遠藤1992)ことが報告されている。さらに、保育場面の報告の中にも、0歳児が保育者や仲間と一緒になかで共感や仲間と一緒に遊ぶ楽しさが築かれていくことが示唆されている(布

施,1992;1993)。本研究の結果も、このような子どもの心身の発達的变化の様子が保育記録に反映しているのかもしれない。しかしながら、4人全ての子どものような記録内容の変化が見られたことを考えると、逆に保育士自身が月齢12ヵ月を過ぎる頃から、無意識にその子どもの保育に対する視点がシフトし、それが保育記録に影響しているとも考えられる。この点について、検討会の中で、「0歳児の保育においては、離乳などを含めて子どもの月齢を意識していないといけないう関わりが多く、特に1歳の誕生日を迎えたかどうかは、無意識に気にしているかもしれない」という意見もされた。この点について、本研究の結果から明らかになることはできないが、「**月齢12ヵ月**」が保育にとって重要なポイントであることは明らかである。

先に述べたように、対応が難しい子としてあげられた子どもの記録は類似しており、一般的にポジティブなイメージの項目が少ないこと、月齢の早い時期には情動反応に関するものが多いことが共通していた。検討会の中でも「1歳までの子どもでは情緒面の安定が関わりの中で最も気になることの1つである」という意見も出されていた。このことから、情緒面の反応の違いが対応の難しさとして認識されているのかもしれない。そして、対応の難しい子どもに対しては、まず情緒の安定をはかるかかわりを保育士が意識しているのだろう。

反対に対応しやすい子としてあげられた子どもの記録の内容はそれぞれ子どもで特徴的であり、共通性が低かった。しいて共通点をあげるならば、一般的にポジティブなイメージの項目が多く、ポジティブではないイメージの項目が月齢12ヵ月以降に多く出現する傾向があった。ただし、保育士はこの点を子どもの心理的発達段階の一環としてとらえている可能性があることが示唆された。

まとめ

子どもの生活の姿を記録することは、保育士が子どもを理解し子どもへの援助の手がかりの1つとして利用するために必要である。保育士自身によって記録された保育記録は、その保育士の子どもの見方や保育に対する考え方、それに基づく子どもとのかかわりの中で気になることや印象に残ったことが記録されており、これらは、子どもの理解を深め、自分自身の保育実践を反省し、次の保育実践を計画していくうえで重要な資料となりうる。したがって重要なことは、保育記録を振り返って考察する際に、子どもの行動や、心の状態、保育士のかかわり方・受け止め方をどのように読み取り、解釈してゆくかである。本

月齢 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

I児

5月前	5月後	6月前	6月後	7月前	7月後	8月前	8月後	9月前	9月後	10月前	10月後	11月前	11月後	12月前	12月後
	+	+	○		+	+	+	+	+	+	+	+	+		

←「ネガティブな情動反応(身体接触欲求)」
 ←「全般的素達」
 ←「ネガティブな情動反応(恐怖心)」

T児

4月前	4月後	5月前	5月後	6月前	6月後	7月前	7月後	8月前	8月後	9月前	9月後	10月前	10月後	11月前	11月後	12月前	12月後
	+	-	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	-	+	○	○

←「ネガティブな情動反応」
 ←「ポジティブな情動反応」
 ←「身体運動」

L児

4月前	4月後	5月前	5月後	6月前	6月後	7月前	7月後	8月前	8月後	9月前	9月後	10月前	10月後	11月前	11月後	12月前	12月後
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

←「ネガティブな情動反応」
 ←「ポジティブな情動反応」
 ←「身体運動」

F児

4月前	4月後	5月前	5月後	6月前	6月後	7月前	7月後	8月前	8月後	9月前	9月後	10月前	10月後	11月前	11月後	12月前	12月後
○	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

「身体運動」→
 「ポジティブな情動反応」→
 「社会性の芽生え」→
 「言葉の芽生え」→
 「自我の芽生え」→

- + ポジティブなイメージ
- ネガティブなイメージ
- ニュートラルなイメージ

図5 4児の各クラスターの出現時期

研究ではその手がかりの1つとしてPAC分析を利用した、保育記録の解釈を行った。PAC分析は個人の主観的態度を数量化するという個性的な分析方法であり、内藤(1997)自身もその適用できるデータの範囲が多様なものになることを示唆していた。本研究では、PAC分析により、保育士個人の子どもに対する視点の内容およびその変化が数量的に示すことができた。特に視点の内容では、第三者が単純に記録を分類しただけでは明確化できないF児の「身体運動」と「社会性の芽生え」のクラスターが抽出された。それにともない、保育士自身も漠然とその違いを感じていた子どもに対する視点を、PAC分析により明確化することができたと思われる。また、I児の2つの「ネガティブな情動反応」のクラスターにおいても、保育士が主観的にとらえていた子どもの行動の違いを導き出すきっかけとなったといえるだろう。さらに、データとしては取り上げなかったが、I児の解釈の検討会の中で、I児の第1クラスターにほとんどの項目が含まれていたという結果をみて、担当の保育士が「この子はいつもニコニコ笑っていていい子だという思いが強く、関わりが難しい子どもへの対応に気を取られ、他の子どもよりもこの子の細かな成長を見落としていたかもしれない」という感想をもらっていた。PAC分析は、クラスターの分析の結果そのものよりも、クラスターの解釈をきっかけとして、より深い自己理解を浮き彫らせることを重視する分析である。今回担当保育士からこのような感想が出てきたことも、PAC分析の効果であったと考えられる。PAC分析は大量の項目を分析することには適しないものの、従来直感的にしか表現できなかった保育記録の解釈を数量的に表現でき、記録者自身も漠然と理解していた子どもの姿を、明確化するきっかけを作れるという点では有効な分析手法の1つであるといえるだろう。

引用文献・参考文献

- 蘭 千壽・武市 進・小出俊雄 1996 教師の学級づくり 蘭千壽・古城和敬(編) 対人行動学研究シリーズ2 教師と教育集団の心理 誠信書房 Pp.76-128.
- 遠藤純代 1988 0歳児後半期における子ども同士の交渉—遊具の役割を中心として— 保育学会(編) 保育学年報 1988年版 フレーベル館 Pp.155-171.
- 遠藤純代 1992 乳児後期における子ども同士の遊び—3名によるゲームエピソードの分析— 児童青年精神医学とその近接領域, 33, 145-162.

- 深田昭三・山崎晃・井上 勝・原 孝成・米神博子・井田晴彦・湯地由美・細田和雅・柏本和子 1995 幼児の自己実現を日常のエピソードからとらえる(II) 幼年教育研究年報, 17, 49-60.
- 布施佐代子 1992 乳児期のあそびにおける保育者との共感の発達の意義 中京短期大学論叢, 23, 175-185.
- 布施佐代子 1992 0歳児保育における「仲間と一緒に遊ぶ楽しさ」の形成過程 中京短期大学論叢, 24, 87-96.
- 井上孝代 1997 留学生の文化受容態度とカウンセリング—PAC分析による事例研究を通して— カウンセリング研究, 30, 216-226.
- 井上孝代 1998 カウンセリングにおけるPAC(個人別態度構造)分析の効果 心理学研究, 69, 295-303.
- 米神博子・井田晴彦・湯地由美・細田和雅・柏本和子・山崎晃・井上 勝・深田昭三・原 孝成 1995 幼児の自己実現を日常のエピソードからとらえる(I) 広島大学教育学部 学部・附属共同研究体制 研究紀要, 23, 7-16.
- 内藤哲雄 1993 個人別態度構造の分析について 信州大学人文学部人文科学論集, 27, 43-69.
- 内藤哲雄 1994 性の欲求と行動の個人別態度構造分析 実験社会心理学研究, 34, 129-140.
- 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門:「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄 2001 PAC分析と「個」へのアプローチ 山本力・鶴田和美(編) 心理臨床家のための「事例研究」の進め方 北大路書房 Pp.108-117.
- 中村万紀子・磯部景子 1994 日々の保育を見直すI—保育記録を、保育後の長い時間経過の中で繰り返し見直す意味— 山口大学教育学部紀要, 33, 259-275.

- 大阪保育研究所 年齢別保育研究委員会(編) 1984 年齢別保育講座 0歳児の保育 あゆみ出版

謝 辞

本研究は、田代保育園の職員皆様が積極的に参加していただいたことにより実現しました。分析のための資料作成や結果の解釈のための検討会に多くの時間を費やすこととなりましたが、それが実現できたのも研究に直接関わらない職員の皆様の温かいサポートがあったおかげです。この場をかりて心より感謝申し上げます。